

沖縄宮古島ウヤガン信仰研究序説

川田 桂 (salut_macherie@hotmail.com)

[名古屋大学]

Belief in "Uyagan" in Miyako Island, Okinawa

Kei Kawada

Graduate School of Literature, Nagoya University, Japan

Abstract

This paper analyzes about Uyagan that is the local belief at village of Karimata, Shimajiri in northern Miyako Island and Ogami Island area, Okinawa Prefecture. These area where tells Uyagan, Kamiuta is sung at the service. So it has been handed down orally. The purpose of this paper is to consider the total image of Uyagan especially from the content of the Uyagan and Kamiuta at Karimata area in Miyako Island. The ritual in Uyagan is held by women who stay those areas. God possess special women who service Uyagan. It is the taboo to speak the details out. So the concrete details are not known except those women.

Key words

Miyako Island, belief of Uyagan, Karimata, religious rites, mythology

1. はじめに

1.1 研究の目的

沖縄県宮古島北部の狩俣、島尻、大神島地域で行われている「ウヤガン」祭は、その秘儀性を保ったまま、地域の女性達のみによって集団的に行われる村落祭祀として知られている。また、そこでは、神役の女性に神が憑依するとされており、いわば憑依型ともいべき祭祀形態が伝えられている。

ウヤガン祭の中心を構成する御嶽での行事内容は、一般にはもちろん、村の人々にも秘され、家族にも話してはならないとされており、その禁忌は今でも厳格に守られつつある。したがってその具体的内容はほとんど知られていない。

このような憑依型の祭祀形態をともなう女性村落祭祀は、島尻では1997年まで、狩俣では2001年までおこなわれており、大神島では現在なお続けられている⁽¹⁾。

このような憑依型の女性村落祭祀は、柳田国男によれば、古くから日本本土と沖縄に共通に存在していたものとされており、現在でもなお、そのような見方は少なからず継承されている。しかし本土では、女性村落祭祀そのものが柳田調査当時すでにほとんど存在せず、また、沖縄でも、女性村落祭祀はノロ制度などの形で存続しているが、憑依形態のそれは3地域以外では、すでに早くからみることができない状態となっていた⁽²⁾。

また、この狩俣、島尻、大神島の3地域では口頭伝承のみによる祭礼時の「神歌」が、一種の神話的伝承として古くから受け継がれている。このような神歌の伝承も日本本土では全く消失し、その他の沖縄地域でもあまりみられない現象である。

それでは、なぜ沖縄県宮古島の狩俣、島尻、大神島、この3地域のみで憑依型女性村落祭祀が最近まで存続してきたのであろうか。また、なぜこの地域には神歌が強固に伝承されているのであろうか。

これまで、当該地域に関して、狩俣や島尻のウヤガン祭については、宮古島在住の郷土研究者などによる概略的な調査報告があり⁽³⁾、また、狩俣の神歌については、外間守善・新里幸昭らによって主要なものは採集されている⁽⁴⁾。しかし、そのような祭祀儀礼や神歌のベースとなっている、いわゆるウヤガン信仰とそれを支える村落生活の全体像を明らかにし、分析・検討を加えた研究は、これまでのところほとんどみあたらない。

そこで本稿では、宮古島北部三地域のウヤガン信仰の全体像を明らかにしていくための第一歩として、まず、狩俣地域のウヤガン信仰の具体的内容、その構造を、祭祀儀礼・神歌・神観念のそれぞれの面から考察する。狩俣をまずとりあげるのは、三地域のなかでも中心的な比重を占め、これまで祭祀儀礼・神歌が比較的良好に採集・保存されてきているからであり、狩俣のウヤガン祭についての検討を基礎に、大神島での調査内容を一部の交えながら分析を進めていく⁽⁵⁾。これをベースに、今後、三地域全体のウヤガン信仰像と、それを支える地域の人々の生活文化、その社会構成などを本格的に検討していきたいと思っている。したがって本稿は、宮古島北部三地域のウヤガン信仰研究の序論的性格をもつものである。

1.2 調査地の概要

宮古島は、沖縄本島（那覇）の南西、石垣島の東北東の方角に位置する。面積は約226,40平方キロメートルで、最も標高が高い場所で114,6メートルという、平坦な島である。年平均気温は23度、年平均湿度は80パーセントで、高温多湿な亜熱帯海洋性気候に属する。地質としては珊瑚礁の堆積による琉球石灰岩からなっており、河川がほ

とんど無く、保水性の低い稲作には不適な土壌とされている。人口は約5万5千人（2009年現在）。主な産業は農業（さとうきび、野菜、葉タバコ、果物など）、漁業、観光業である。また、宮古島の北方約16キロメートルには、豊かな漁場として知られる、周囲25キロメートルほどの巨大なサンゴ礁が広がっており、八重干潮（ヤビジ）とよばれている⁽⁶⁾。

狩俣は、宮古島の中心的市街地である平良から北方へ車で20分ほど、西平名崎の付け根に位置する。集落の北東部には標高20～30メートルの丘陵が細長く続いており、「フンムイ」と呼ばれる神聖な森となっている。その森を海側からの風よけにするかたちで、森の南西に集落が広がっている。人口は282戸、685名（2007年）。生業は、さとうきび・たばこ・島らつきょう・落花生・甘藷栽培などの農業が中心であり、もずく養殖・漁業を営む家も40戸前後存在する。

宮古島の中でも比較的古くから存在する集落と言われ、15世紀に宮古島を統治した仲曾根豊見親の時代、大神島、池間島、狩俣、伊良部島を治める四島の主（ユスマノシュ）が居住した地でもある。かつてはこの村の周囲は石垣で囲まれており、部落の南東端と、部落の北西側の森と集落との境目には、現在でも石でできた「トゥリヤ」（通門）が現存する。この石垣・石門は宮古島でも狩俣のみにみられる特徴である⁽⁷⁾。

各戸の周囲には、かなり高い防風林が生長しており、村落全体として落ち着いた豊かなたたずまいとなっている。

2. 祭祀儀礼—狩俣のウヤガン祭

狩俣部落はかつて、1年を通して間断なく祭祀がおこなわれていた。その中でも最も重要な祭りとして意識されているのがウヤガン祭である。

狩俣の年中行事は、大きくフーニガズ（冬祭り）とナツブーズ（夏祭り）に分けられる。フーニガズ（冬祭り）とは、部落の信仰上大切なものとされるウヤガン祭のことであり、旧暦10月から12月にかけておこなわれる。ナツブーズ（夏祭り）は、それより以前に行われる行事のことをさすが、その中でもとくに重要な祭りがムギブーズ（麦の祭り）とアワブーズ（粟の祭り）である。それぞれ旧暦3月および6月におこなわれ、収穫後のいわゆる豊年祭として重要な意味と役割をもっている。ちなみに、粟・麦生産の季節的サイクルについてみると、麦は旧暦10月ごろ播種がおこなわれ旧暦3月に収穫。粟は旧暦2月ごろ播種、旧暦6月収穫となる。

狩俣のウヤガン祭は、おもに御嶽（神聖な森）内部での神役女性のみによる秘儀的行事を中心におこなわれ、神役の御嶽入り前後には、彼女らが神の名をあげ神の歴史を謡って神をほめたたえる儀礼がみられる。それに対して、ムギブーズ、アワブーズは、収穫を神に感謝する儀礼で、神役の女性のみならず、成人男子や子供達も参加し、様々な行事がおこなわれる。

狩俣のウヤガン祭については、先に記したように、宮

古島在住の郷土研究者などによって、ある程度概略的な調査がなされているので、それらを利用しながら、筆者のこれまでの調査を加えるかたちで、以下検討していく⁽⁸⁾。

さて、狩俣のウヤガン祭は、大神島のウヤガン祭の終了を受け、旧暦10月から12月にかけて、村の北東部に広がる森（フンムイ）の中にあるニスノウタキ（西の御嶽）で計5回、各数日間の山籠りを行う。旧暦10月に4日間、旧暦11月には4日間、3日間、3日間の3回、12月に5日間の山籠りをもって終了する。

狩俣部落は、ムトゥ（元）と呼ばれる部落の始祖とされる家があり、その屋敷跡とされるムトゥヤー（元家）が7カ所ある。部落の各家は必ずどこかのムトゥに所属するものとされており、それぞれのムトゥの所属員をファーマーと呼んでいる。現在では、ユームトゥ（四元）といわれる主要な4つのムトゥにのみファーマーが存在する。したがって、狩俣の現住人は、基本的にこの4つのムトゥのどこかに所属している。ただ、各ムトゥに属する家々は、それぞれ集合的に居住しているわけではなく、村の中に混在している。かつて昭和の初期頃には、ムトゥ集団の数もムトゥ屋敷跡と同様に7箇所であったが、その後減少し現状の4箇所となったようである。

現在のユームトゥの名称と祭神名は次のとおりである。
①ウブグフムトゥ（大城元）、祭神は、ムラ建ての神（アサティダとウマティダ）②ナーマムトゥ（仲間元）、祭神は、航海の神（マーンツザーリユグーサス・パナヌサス）③シダディムトゥ（志立元）、祭神は、五穀豊穡の神（ユーヌヌス）④ナーンミムトゥ（仲嶺元）、祭神は、水の神（ミズヌヌス）。

すでに所属員のいないムトゥの名称は、⑤マイニヤームトゥ（前の家元）、⑥ニスヌヤームトゥ（西の家元）、⑦カニヤームトゥ（金屋元）である。マイニヤームトゥおよびニスヌヤームトゥの祭神はウブグフムトゥと同じであり、カニヤームトゥの祭神については不詳である。

また、ユームトゥの神役組織の概略をみておくと、①ウブグフムトゥ（大城元）の神役は最上位のアブンマ（ツカサンマ）ほか8名、②ナーマムトゥ（仲間元）は最上位のミョーニヌ主^{ヌス}ほか3名、③シダディムトゥ（志立元）ナーンミムトゥ（仲嶺元）は最上位のユーヌ主（ヌス）ほか4名、ナーンミムトゥ（仲嶺元）最上位のミズヌ主^{ヌス}ほか3名である。

狩俣のウヤガン祭では各ムトゥの司祭である神役女性（ウヤパーと呼ばれる）が祭りを主催し、いわゆるウヤガンとなる。また、各ムトゥのファーマーの家から55歳～65歳程度の男性が周辺の儀礼に参加することになっている。ムギブーズ、ウブブーズなどの夏祭りはムトゥごとに行われるが、この冬祭りのウヤガン祭はすべてのムトゥのウヤパーが協同しておこなう祭りである。

これらのムトゥの神役組織のうち、ウヤガン祭で山へこもるのはユームトゥ（四元）の上位の神役、すなわち、アブンマ（最高位の神役）、ミョーニヌ主、ユーヌ主、ミズヌ主の他、ウバラズ、マンザンマ（いずれもユームトゥ以外のムトゥの神役）、フサヌ主（2名、ウブグフムトゥ

の神役組織の一員)である。この神役達はすべて世襲ではない。

またさらに、各ムトゥのファーマーの中にはウヤガミ筋とよばれる家々があり、それらの家の主婦がウヤガンとして祭祀に加わる。これは、ウヤガミ筋家系の子供が代々、嫁継ぎで継承する。彼女たちは、ウヤガン祭のときのみ神事に加わり、他の行事のときには神役としての役割はない。なお、山へこもらないその他の各ムトゥの神役達は部落のムトゥヤー(元家)などで待機し、ウヤガン達が部落へ現れたときのみ、行動を共にする。

ウヤガン達は、山ごもりのさい、ニスヌムイ(西の森)とよばれる、部落の背後に位置する小高い山の森の中で過ごすと言われている。その中には、アガウタキ(東ウタキ)、ニシウタキ(西ウタキ)、イスツウタキ(磯のウタキ)の、3カ所のウタキ(御嶽)がある。

アガウタキの向かいには、ウヤガン達がこもるウドゥヌ(御殿)とよばれる小屋が建てられており、また、別の場所にも同様の小屋が建てられているという。ウドゥヌ(御殿)はアガウタキ(東ウタキ)に向かいあうようにコンクリートで立てられた奥行き3メートル幅5メートルほどの小屋で、入り口とは別に、小屋の中からウタキを拝めるように小窓がついている。

森の中でのウヤガン達の行動は秘せられており、はっきりとはしていないが、これらの御嶽での儀礼、および森の中に数箇所あるといわれる聖地での儀礼などが行われるようである。また、部落に現れる際の草冠などもウヤガン達が森の中で自ら作成するため、それらの時間にもあてられている。なお、森の中でのウヤガン同士の会話は、日常的に使用している言葉ではなく、古い昔の言葉を使うとされている。それでは、以下に儀礼の詳細を記す⁹⁾。

2.1 第1回目の山籠り—ジープバナウヤガン(杖の初めのウヤガン)

2.1.1 ウヤガン達の集合

ジープバナウヤガンのジープとは「杖」、バナは「初め」という意味を持つ。

旧暦10月最初の亥の日の午後、ウヤガン達が平服でザー(座)と呼ばれる広場に集合する。現在の狩俣のザーの広さは、約10平方メートル程度で、土の上に薄く芝が植えられており、その北の縁に大きな樹が植えられている。この樹は、一種の依座と考えられているようである。その樹の下が、ウヤガン達がフサを歌う場所となっている。また、広場の端に小屋が建てられており、ウヤガン達が宿泊するための場所となっている。

そのザーにおいて、まず、アブンマ(最高位の神役)・スパーギ(ウヤガンの先導者)によってフサ(神歌の一つ。次節で詳述する)が歌われる(この行事をザーンザスクウと言う)。そして、その日はザーの端にある小屋に宿泊する。

ザーは、ウヤガン達が集合したり、部落に降臨した際にフサを謡う場になるなど、ウヤガン祭における主要な

場所の一つである。

2.1.2 山入り

丑の日の朝、ウヤガンたちが神衣持参でウブグフムトゥ(大城元)に集合し、ウヤガン祭が始まることを祈願する。

午後1時ころ、ザーの後方から東側の森ウナグルヤマ(貝殻山)へと上っていく。「スサグ」(またはスサスグ)という、神がおきてくるとされている浜辺で「カミンケーイ」(神迎え)が行われる。筆者の聞き取りでは、この浜辺の場所は部落の南西にある断崖下の磯とされている。また、スサグではキャーンと呼ばれるつる草から草冠をつくる。その後、スパーギの先導で円陣をつくり、中央に立つアブンマの先唱でフサを謡って輪舞する。大神島と狩俣の神を迎えると言われ、大神島の神は天から、狩俣の神は南方の海から来るという。

終わると再びザーに戻り、ザーの前の道を通ってニスヌムイ(西の森)のウドゥヌ(御殿)に入り、巳の日までの4日間、クウムズ(籠もり)が行われる。

寅の日には、ウドゥヌの前の踊り座で、アブンマ(最上位の神役)、ミズヌヌス(水の主)、ユヌヌス(世の主)など、それぞれのムトゥの上位の神役がフサ(神謡)を歌う。神女がフサを歌い終えると、次にフサヌヌス(フサの主)がウドゥヌ(御殿)の中で「真津真良のフサ」「ミヤームギのフサ」「磯殿のフサ」「河良原のフサ」を歌う。これを朝の勤めという意味で「チトゥミチトゥミ」という(フサについては、次節で詳述する)。昼からは同じようにフサヌヌスがウドゥヌの中で「阿応理やえのフサ」「継母のフサ」「兼久大按司成り按司のフサ」「兼久大按司のフサ」「那覇港のフサ」「トーナジのフサ」「下男のフサ」の7つのフサを歌う。

卯・辰の日も同様に繰り返す。それ以外の部分は、いまなお明らかになっていない。

2.1.3 下山(顕現)

巳の日の午後3時ころ、部落のムトゥヤーにつめていた各ムトゥの神役達が、トゥユピートウイ(西門)という、ミヤーク(現世)とカンヌユ(神の世界)の境界にある石門から、ニスヌヤマに入りウヤガンたちを出迎えに行く。神役達はみな、ブーパーニと呼ばれる麻の神衣を着用している。ウヤガン達が一列になってスパーギ(神役の一つで、常にウヤガン達の先頭に立って歩く)の先導で部落に現れ、ザーに至る。頭には草冠をのせ、麻の神衣装を着て、手には杖を持った「神」の姿である。

ザーでは、スパーギが杖でザーのミナカ(庭)の祓いを行い、マンザ(円陣)が作られる。ウパラズ(ザーをつかさどる神役で、ウヤガン祭のときのみ役目)が円陣の中心になり、ウパラズを背後から支えるようにしてウブツカサ(ウヤガン祭において最上位の神役で、アブンマが務める)が立つ。ウパラズがフサを一節うたうと、他が復唱する。フサは「ジープバナヌフサ」といわれる神謡で、籠もりなどの祭祀の経過が歌われている。

儀礼が終わると、神装具を石垣の上に置き、ザーの小屋内にて祈願をした後、ウヤガンの家族らからの湯茶の接待をうけて、翌朝に帰宅する。

2.2 第2回目の山籠りーイダスウプナー(又はイダスカン) 旧暦11月初酉より4日間

イダスウプナーとは、新しい祖神(ウヤガン)をイダス(選定する)祭りであるとの意味をもつ。

2.2.1 山入り

初日の早朝、ウヤガン達たちがウブグフムトゥのアブンマの家を訪ね、祭神に祈願を行う。午後2時頃、神衣裳を風呂敷に包んで小脇にかかえたウヤガン達がティンドー(天道)とよばれる場所に集合する。ティンドーとは、ザーの後方の森の中にある。石垣を組んで円形の舞台(直径1メートル、高さ1メートル20センチ程度)のようにしてある台がティンドーである。そのすぐ北側は海が開け、ティンドー周辺は広場ようになっており、ウヤガン達はそこで神衣裳に着替えて円陣をくみ、アブンマの先唱でフサをうたって輪舞する。その後西の森へと入っていく。

ティンドーへ向かう際、ウヤガン達はそれぞれの家から各々「道行の神歌」を歌いながら集まる。その神歌の内容は「根立ての主」や「四元の神」などの神の名を唱え、その霊力を讃えるものである。

2日目の夜、ウヤガン達が村に降臨し、新たに加入するウヤガンの家の前でフサを謡う。マンザンマ(マイニヤームトゥの神女)が家にあがり、新たにウヤガンとなる女性を連れだし、次の家へと移動する。つれられた女性は、西門を通過するとたちまち神がかりして失踪し、その晩はそのままにしておくといわれている。(筆者の聞き取りによれば、西門を通過したのち、新たに加入するウヤガン達は所定の位置に集められ、一晚を過ごす。その際、新米ウヤガンの他、数名のウヤガンが付き添い、山の中での行動について教えるという。)次の日の午後になると、ウヤガン達と新米ウヤガン達が合流する。

2.2.2 顕現

子の日午前3時から、神衣裳をつけて草冠をかぶったウヤガン達が「アサーン」(朝の務め)と称し、新ウヤガンとともに部落へ降臨する。マイニヤームトゥ、ウブグフムトゥ、ニスニヤームトゥの順に訪問し、フサを唱し、部落に残っていた神役からもてなしをうける。その後再びニスニヤームイ(西の森)に戻る。

昼に再び部落に降臨し、朝とは逆の順にニスニヤームトゥ、ウブグフムトゥ、マイニヤームトゥを訪問し、各ムトゥの庭でフサをうたって輪舞する。1回目の祭祀の際(ジープバナウヤガン)はザーでフサを謡ったが、2回目の祭祀(イダスウプナー)ではウブグフムトゥを中心にその分家といわれる2つのムトゥでフサをうたう。なお、2回目と5回目の祭祀のみ、そのようなウブグフムトゥやその分家筋のムトゥでの儀礼が行われる。その後ムトゥ

からザーへ直行し、草冠と衣裳をぬぐと、再びティンドーへ登り、そこでフサをうたって祈願したのち、ニスニヤームイにもどっていく。宵にも「ユナーン」(夜の努め)と称し、白の神衣裳に草冠をかぶり部落に降臨する。ユナーンの際、神女たちは三組にわかれてウブグフムトゥの庭へ声をあげながら疾走してくるが、合流すると円陣をつくり、フサをうたって輪舞する。

なお、着用する衣裳および草冠について、2回目および5回目の祭祀の際は他の3回の祭祀と異なるものを着用する。1回目、3回目、4回目の祭祀の際には、麻の神衣裳を着用するが、2回目と5回目の祭祀では、白の木綿の衣裳を着用する。また、草冠についても2回目および5回目は他の3回よりも大ぶりになる。他の3回で使用される草冠はずっと同じ物を着用するが、2回目と5回目の降臨の際につかう草冠はそのつど、新しくつくったものを用するという。

その晩から神女たちは、ウブグフムトゥ、マイニヤームトゥ、ニスニヤームトゥの三つのムトゥにわかれ、それぞれ4日間こもりながら村人たちのために祈願を行う。

2.3 第3回目 フーフナー(又はマトウガヤー) 旧暦11月申から3日間

この行事は部落につく悪霊を祓う意味で行われる。

ニスニヤームイに登るに先立って、マトウガヤーという民家に招待されて赴き、当家の主婦から豚肉料理で接待をうけることからマトウガヤーと言われる。申日の午後、ウヤガン達がマトウガヤーへ集合し、当家の主婦から豚肉料理で接待をうける。

アブンマが「祓い声」と「ヤーキヤー声」のフサをうたって感謝をあらわし、その後ティンドーへ登る。そこでアブンマの先唱で同様のフサを調子を変えてうたって祈願したのち、ザーからニスニヤームイへ登る。酉の日の夜、集落を祓い清める行事を行う。部落の中をウヤガン達が草の束で家の軒や石垣などをたたいて回る。

戌の日の朝、森の中で朝の勤め(チトゥミチトゥミ)をした後、ティンドーのそばの「マイパナダ」(前端)と呼ばれる高台にたち、「大家の真男のフサ」「ミヤームギのフサ」「那覇港のフサ」などを歌う。午後3時頃、ザーにて1回目の祭祀(ジープバナウヤガン)と同様にフサをうたって終了する。その後、ザーにて一泊して翌朝帰宅する。

2.4 第4回目 アブガー 旧暦11月寅の日より3日間

寅の日午前7時より、ザーに集まり、部落東の果てにあるアーラバリという畑に行き、そこで、ジープン(豊作儀礼)の儀礼を行う(ジープンとは、ウヤガン達が神フサを歌いながら畑にふみこみ、土をふみしめて豊作のしるしをとどめる儀礼である。村の畑を次々横切り、踏みしめて大世の種子をまくとされる)。その後三箇所の畑をまわり、それぞれの場所でフサをうたう。また、帰り道では所々で畑の中に草束の葉を投げ入れる。これは畑地をはらい清め、豊作をもたらすという意味であるとい

う。

部落に戻ったのち、再びウドゥヌに戻って夜籠もりが行われる。畑をまわった際、途中の畑でニンニクとネギをとり、それをニスヌヤマのウタキに供えて祈願が行われる。次の日、1回目と3回目の祭祀と同じようにザーで「祓い声」が謡われる。

2.5 第5回目 トゥディアギ 旧暦12月申の日より5日間

旧暦12月の申の日、ティンドーにてこれからの行事の成功を願ったのちに「根口声」を謡い、4日間の山籠もりを行う。

以後3日間は午前2時頃からニガイをし、「祓い声」「ナービ声」「ヤーキヤー声」を歌い続ける。

4日後の亥の日、島尻部落と狩俣部落の間にある「ユーンシ」という場所に、神マキャン主を崇べにゆく。この神は草冠を給う神といわれる。ここでは「ユーンシのフサ」が歌われる。その後、ウドゥヌの前の踊り座で「踊り座のフサ」をうたったのち、夜の降臨のための杖の準備や草冠の作成にとりかかる。

午後11時頃、ウブグフムトゥ、マイニヤームトゥ、ニスニヤームトゥの順にムトゥをまわり、各ムトゥでフサをうたった後、明け方再びニスヌムイへと戻っていく。ムトゥでは戸が閉められ、外からこの様子を見ることはできない。ムトゥの中では、「根口声」「ヤーキヤー声」「家の主親阿母のフサ」をアブンマの先導のもと歌う。次に、フサヌ主の先導のもと、「真津真良のフサ」「ミヤームギのフサ」「磯殿のフサ」「河良原のフサ」「阿応理やえのフサ」「継母のフサ」「兼久大按司成り按司のフサ」「兼久大按司のフサ」「那覇港のフサ」「トーナジのフサ」「下男のフサ」が午前6時半ころまで間断なく歌われる。午前6時頃、ウヤガン達は再び山へと帰っていく。ウヤガンが去った後、男性達がパイヌヤー（ウブグフムトゥの南側にムトゥヤーと向かい合うように建てられている小屋）にて三十三拝（ミソハイ）を行う。

マイニヤームトゥでは「前の家元のフサ」、ニスニヤームトゥでは「西の家元のフサ」が歌われる。

子の日の午後3時頃、ウヤガン達が御獄から再び部落へと降臨し、ニスヌヤームトゥ、ウブグフムトゥ、マイニヤームトゥの順に円陣をつくって「祓い声」「ナービ声」「ヤーキヤー声」が謡われる。ムトゥで神歌を終えたウヤガン達は、「道行のうた」を歌いながらザーへと移動する。その道行きの際に謡われる歌のなかに「ウブドゥンミ（南の浜にある岩礁）に来年も来てまた待っていたら、神々は来臨する」と謡われていて、狩俣に始祖たちが南方からきたとする根拠とされている。ザーに到着すると神衣裳や草冠を脱いで石垣の上に置き、終了となる。それぞれ各所属のムトゥへ行き、数日間ムトゥで宿泊し直会が行われる。

翌丑の日の午後3時、ウブグフムトゥにて「ングウンク」の儀式が行われる。

以上が現在までに知られている、狩俣の冬祭り、すな

わちウヤガン祭の内容である。現在でも狩俣のウヤガン祭は、その中心部分が秘密のベールに覆われたまま途絶えており、神役の女性が1人残るのみである。

3. 神歌

狩俣は、神話的伝承ともいえる神歌を永く受け継いでいる希有な地域でもある。神歌の内容には、部落の創生にかかわる神話的世界や、歴史的経緯、人々の日々の営みなどが豊かにうたいこまれ、きわめて興味深い。この狩俣の神歌については、外間守善・新里幸昭によって主要なものは採集されているので、以下、それをもとに、狩俣に伝わる神歌について考察する⁽¹⁰⁾。

外狩俣部落に伝わる「神歌」とされるものには、フサ・ニーリ・タービ・ピヤーンなどの種類がある。これらは、狩俣の年中行事の多くの場面で謡われるが、夏祭りであるムギブーズの際には、タービとピヤーンが謡われ、アワブーズではタービとピヤーンとニーリが謡われるなど、行事によって謡われる歌の種類が異なっている。フサは、冬祭りであるウヤガン祭のときのみにうたわれる。

歌の内容としては、狩俣の創成など部落創生をはじめとする部落の歴史的経緯などがうたいこまれている。タービ・ピヤーンは神の名をあげ、褒め称えるカンナーギ（神名揚げ）である。ニーリは、狩俣のウブグフムトゥにのみ伝わるものであり、ムラの創成以来の出来事がもっとも体系だった形でうたいこまれている。

以下に狩俣に伝わる神歌であるフサ、ニーリ、タービ、ピヤーンそれぞれについて、詳しくみていく。

3.1 フサ

フサは、正しくはカンフサ（神の草）と称し、神々の宮古島への降臨から、神の子の誕生、部落創世のための様々な生活行動を述べたり、神の降臨を祝う神歌である。

ウヤガン祭の時にのみ謡われ、神役の女性のうち、フサヌヌスという役の女性が先導して、それに続いて他の神役の女性が謡う形式をとる。

現在23首が採取されている。その中の主要なものを見ていくと、(ア) 神の来歴を語るもの、その後の系譜を語るもの（イ）ある親族と親族の抗争を語るもの（ウ）井戸を掘ったことなど、部落にとって重要な功績をたたえるもの（エ）継母と継子の争いの話や、ある男性の側妻が妊娠し、本妻を追い出す内容といった、一見神とは関係のない内容のもの、などがある。

- なかでも、ウヤガン祭で謡われる頻度の高いフサは、
- ① 真津真良のフサ（5回のウヤガン祭のうち、1回目、及び5回目に謡われる）
 - ② ミヤームギのフサ（ウヤガン祭の1回目、3回目、5回目に謡われる）
 - ③ 磯殿のフサ（1回目、5回目のウヤガン祭に謡われる）
 - ④ 川良原のフサ（5回目のウヤガン祭で謡われる）
 - ⑤ 阿応理やえのフサ（1回目、5回目のウヤガン祭で謡われる）
 - ⑥ 継母のフサ（1回目、5回目のウヤガン祭で謡われる）

- ⑦ 兼久大按司成り按司のフサ（1回目および5回目のウヤガン祭で謡われる）である。これらが基本のフサとされ、ナナフサ（7フサ）と呼ばれる。また、
- ⑧ 兼久大按司フサ（1回目のウヤガン祭で謡われる）
- ⑨ 那覇港のフサ（1回目、3回目、5回目のウヤガン祭で謡われる）
- ⑩ トーナジのフサ（1回目、5回目のウヤガン祭で謡われる）
- ⑪ 下男のフサ（1回目、5回目のウヤガン祭で謡われる）
- ⑫ 大根のフサ

をくわえた12のフサをトゥウフタフサ（十二フサ）とよんでいる。その他、いくつかのフサの存在が確認されているがここでは省略する。

そして、これらのフサで主要なフサの1つが真津真良のフサである。その内容は次のようなものである（訳は、(外間・新里, 1978)による）。

「真津真良のフサ」

かんままきとうりる ぬっさぶゆたりる
 神は和やかに 主は穏やかに
 にしまーらうりんな
 根島から降りてくる時には
 しらじからうりんな
 シラ地から降りてくる時には
 ばんがフサうぶんがん かんぬフサぶさす
 わがフサを大神は 神のフサをほしがり
 うしなうしうりて ぬいなぬーりうりてや
 押しに押しして降りて 乗りに乗っておりて
 このずにおりて このみゃーこんうりて
 この地におりて この宮古に降りて
 (以下略)

このように対になるフレーズを繰り返しながら全体で118行に及ぶ。その内容の概略を記す。

始めに狩俣に漂着した女性と、「山のフシラズ」という大蛇との間に生まれた「マヤ（真屋）のマツメガ」という神が、狩俣の創成神となる。その後、ウブグフマダマ（大城真玉）という神が登場し7人の子を生み、5人の子供が成長した。その系譜がかなり詳細に謡いこまれる。すなわち、マバルマ（長女）を生んで、真山戸（長男）、世勝り（次男）、シシミガ（次女）、マバラジ（3女）、マカナシ（4女）、真津真良（5女）という順に誕生した。特に末子の真津真良は機織りの名手として広く知られ、宮古島のあちこちから買い手が訪れ、広くその評判が行き渡った。その名は天や地の底（ニッジャ・カナヤ）まで聞こえた。そのような「私」を母が生んでくれた、照り美しく生んでくれた。そして、自分の心で生まれてきたのだ、と結ぶ。

次に、もう一つの重要なフサとされる、「川良原のフサ」については、全体の形式はマズマラのフサと同様の形で168行ほどになる。その内容を要約すると次のとおりである。

マバルマー（人名）が、水をもとめて、アカグ（地名）

という地に清水を発見する。その清水をくみとって舟にのせ、狩俣の杜や御嶽をまわってささげる。その後大神島にわたって司種をおろし（司を指名して）、イイサドヤー祭（大神島のウヤガン祭の2回目の山籠もりの祭のこと）をねづかせたとある。さらに、マバルマーが世籠もりをしてから3ヵ月後に白鳥・大鷲になり、航海安全の神になっただけではなく、すべてに豊穰をもたらす神（万付きの神）になったとうたわれている。

実際のウヤガン祭の場面でも、山の中でウヤガンが木にのぼり、鳥のように両腕をふるしぐさをするという。また、山の中などでウヤガン同士が合図をしあうときにも「オロオロオロ」と裏声のような高い声でよびあうとされるが、それも鳥の声を模したものとされている。また、大神島のウヤガン祭では部落に降臨したウヤガン達がフサをうたう際、フサとフサの間にはかならず「オロオロオロ」との掛け声をいれる。

3.2 タービ

タービは、神の名をあげ、神を崇べ奉り、ほめ讃えるカンナーギ（神名揚げ）である。ムギブーズ（麦祭り）およびウブブーズ（五穀祭り）などの夏祭で各ムトゥの最も上位の神役の女性によって謡われる。歌を謡う際には、それぞれの司祭するムトゥで座ったまま、前方から顔が見えないように神衣を頭より上にあげ、両手で広げ、震わせながら謡う。このタービは宮古島の他の地域では採集されていない。

内容としては、神である「私」が神々の名乗りを謡い、次にその神の業績・生活・歴史を中心に讃え、「謡い手が祖先神の血筋を引いた神女であり、昔の通り間違いなく霊力をとりました」と結ぶ。

フサがウヤガン祭でのみ謡われるのに対して、タービが謡われるとされる行事はウヤガン祭以外に下記のものがある。

旧暦1月トゥシヌバン（年の願）、2月カタフツウブナー（片口大祭り）、アーズヤマ（東山）、3月ムギブーズ（麦穂祭）、6月アワブーズ（粟穂祭、別名ナツブーズ〈夏祭り〉）、7月アーズヤマ（東山）、8月ユークイ（世乞い）、10月ウブイビムヌ（大威部もの）などである。

以下、代表的なタービである、「ハライグイ」の内容について見てく。

「ハライグイ」

やふあだりるむむかん

穏やかな百神

はらいはらい

（囃子。祓い、祓い、以下略）

なゴだりる ゆなオサ

和やかな世直さ

ていんだオノ みオぶぎ

天道のお蔭で

やぐみゆーいノ みオぶぎ

恐れ多い神のお蔭で

あさていだノ みオふぎ
あさていだ
 父太陽のお蔭で
 うやていだノ みオふぎ
 親太陽のお蔭で
 ゆーチク みうふぎ
 夜の月のお蔭で
 ゆーていだノ みうふぎ
 夜の太陽（月）のお蔭で
 にだりノシ わんな
 根立て主の私は
 やぐみかん わんな
 恐れ多い神の私は
 ゆーむとうぬ かんみょー
 四元の神は
 ゆーにびぬ かんみょー
 四威部の神は
 (以下略)

このタービは、全体では88行ほどである。部落創世の神であるウマヌ神が村立てをするために水源を求めて探し歩き、ついにイスガガーという水源をを発見し、そこに村立てをした、という内容である。

ンマヌ神である「私」は最初タバリ地において、カナギ井戸にたどり着いた後、カナギ井戸、クルギ井戸、ヤマダ井戸、イス井戸にたどり着く。そこで、そこに居をかまえることとした。海からの風、寅の方角からの風がふいたら、海鳴りが恐ろしい。と結んでいる。ンマヌ神である「私」が住みかを得るまでの経緯が謡われているのである。

3.3 ピャーシ

ピャーシの語義は「拍子」の意味ととらえられている。タービと同じように、神の名をあげ神をほめ讃えるカンナーギで、前半で、祈願の対象となる神々を讃え、後半部分は豊作祈願や子孫繁栄の祈願になっている。また、「ピャーシ」とは「おだてる」という意味もあり、神々をおだてて囃し、その見返りとして豊穰をねがったものとされている。

狩俣の4つの代表的なムトウそれぞれに、1つずつピャーシが伝わっている。夏祭りの際に、ムトウ（元）に集まった人々によって男女別に謡われる。「マイビ」と呼ばれる歌を先導する役が先に謡い、皆が後に続けるという形でうたう。

ピャーシについても、形式や表現はタービによく似たものである。ピャーシの中でも代表的なものとしては「御風鎮（うかじだみ）のピャーシ」がある。全体では90行ほどで、その内容は概ね次のとおりである。

まず「天道の神」「父太陽」「親太陽」「夜の月」「根立て主」「4元の大神」「屋敷神」「お籠の神」「朝餉・夕餉の神」「家葺き針の真主」「家の神」など様々な神々の名をあげ、謡い讃える。そして、今日の直る日に大座、磯座に神々が集まるのは、御風鎮め・真風鎮めのためであり、供え

る場所がないほど神酒を入れた甕も並べている、神女がそれを「やばていー」（優主、立派な手）で受け、拝みをしていると謡い、島（部落）の子孫はこれまでも神のご加護により繁昌させてもらっているが、健康第一にして、地に捲くものすべてに誤りなく豊穰をください、というように、甘藷などの豊穰祈願の対象を並べ立て、展開していく。

3.4 ニーリ

ニーリは、夏祭りの中のウブブーズ（五穀祭り）の際に4日間毎日謡われるものである。ニーリの謡い手は男性であり、しかもウブグフムトウの男子に限られる。謡う場所もウブグフムトウのみである。狩俣につたわるニーリは「狩俣のニーリ」一つのみであり、ウヤガン祭では謡われない。もっとも体系だった構成になっており、長編であるので先に内容の要約を示す。

(1) 第1章（天の赤星のニーリ）

山のフシライという自然神の精をうけた狩俣の始祖（女性）、つまり祖先神から人格神であるマヤノマツメガが生まれる。マヤノマツメガは百草、八十草（部落民）の支配者として君臨することになる。

(2) 第2章（大城真玉のニーリ）

大城マダマという女酋が登場する。マヤノマツメガとの系譜関係は不明であり、時代的懸隔があると考えられている。大城マダマからの系譜が謡い込まれるが、生まれ子の始めに女性が登場していることは祭祀儀礼をつかさどる女権優位の時代を投影している、ととらえられている。

(3) 第3章（真津真良のニーリ）

大城マダマの末子、マズマラー女酋の全盛の時代を、機織り（生産活動）に象徴させてうたっていると解釈されている。その事蹟が沖縄本島（中山）まで届いたということから、このニーリは宮古が沖縄を意識し始めた時から後の年代の創作であることがわかる。また、まだ宮古島が群雄割拠の時代、他部族が侵略的意図をもって狩俣を襲撃してきたため、マズマラーの甥、マヤノマブコイが活躍する。このようなマヤノマブコイの英雄的出現は、男性の社会的台頭として注目されている。すなわち、呪力を持つ女酋の君臨時代から、武力をもつ男酋の時代へとうつりかわりつつある時代ととらえられる。

(4) 第4章（大城殿のニーリ）

ここでは、ついに大城殿とよばれる男の権力者が出現し、男酋の時代となる。井戸開掘や鉄製の大槌、手斧などを部落にもたらした英雄として謡われている。このマズマラーから大城殿への権力交代は部落統率のための女権が男権へ移り変わっていったと読み取られている。

(5) 第5章（鳴響む世勝り）

大城殿の後をうけたユマサズ（社会的能力にすぐれているという、象徴的表現）によって、築城、建築、造船、航海、貿易といった社会的事業が次々に進め

られ、狩俣部落における政治的社会的成立を伺わせる内容となっている。ユマサズは地方的按司（政治的支配者）の1人としての地位にあったと考えられる。

以上のような構造から、「狩俣祖神のニーリ」は狩俣部落に久しく口承されてきた神歌のフサ、タービ、ピヤーンシ、その他の伝承などを下敷きにして次第に積み重ね、最終的には仲宗根豊見親の時代の頃に、全体の体系的なまとめと沖縄を意識する部分的肉付けがなされたものと見られている。

この「狩俣のニーリ」は、第5章まで含めると484行にもおよぶ壮大なものである。ニーリの中にトゥイミヤ（豊見親）という呼称が歌われていることから成立年代としては、1500年代以降と思われる。トゥイミヤ（豊見親）とは島の権力者のことであり、時代に応じて、テダ（太陽）→アズ（按司）→トゥイミヤ（豊見親）とよばれてきた。トゥイミヤという呼称がでてくるのは1500年、仲宗根豊見親という人物が最初である。歌の構成や狩俣の歴史が最も体系だって整理されていることから、タービ、ピヤーンシから、歴史の部分をもより強調して構造化され、狩俣のニーリが出現したと考えられている。

以上が、狩俣の神歌である。なお、先のウブグフムトゥの伝説と同様、各ムトゥにはそれぞれ特有の伝説が残されているが、これらと神歌との関連は、今のところ判然としない。今後の検討課題である。また、大神島にもこれらのような神歌が存在するが、内容としてはまったく異なるものである。

4. 神観念

最後に、神観念について述べる。神観念については、これまでの狩俣についての諸研究や筆者の狩俣についての調査のみでは資料的に不十分であるため、大神島を参考にしながら検討をおこないたい。大神島は、狩俣から見て北側の海上にあり、人口29人、14戸（2009年4月現在）ほどの小島である。先にも触れたように、狩俣のウヤガン祭は、大神のウヤガン祭の終了後、その神を迎えておこなわれるとされている。

さて、ウヤガン祭の「ウヤガン」には、しばしば「親神」や「祖神」という言葉が当てられているように、一般には、ウヤガンは祖霊と観念されているようである。そして、その観念されている「祖霊」が、始祖をさすのか、代々の祖先をふくめた観念なのか、あるいはまた何らかの特定の祖霊なのか、という点については判然としない。部落の始祖と考えられているとの説もあるが⁽¹¹⁾、根拠が示されていない。

筆者の調査においても、大神島の神役の女性Tさんによれば、「人は簡単には神になれない。生まれ変わる」、「神様と私たちの先祖とは違う」とのことであった。また、ウヤガン祭で「天からおりてくる」とされる神を「神様」とよび、また、先祖のことは「死んだ神様」と表現するなどの例がみられ、「天からおりてくる」神と、自分たちの先祖とは違うものと観念されているようである。例えば、大神島でのウヤガン祭が終了する日に行われる「マ

ウケーニガウ」とよばれる儀礼において、ムトゥヤー（元家）の東の角と西の角に小麦粉を水でといたものをおく。東は「神」に、西は「死んだ神」へのものとしており、ここでも神と祖霊（死んだ神）は、別々に観念されていることがわかる。

しかし一方で、神は普段御嶽にいる、とも考えられており、御嶽にいる神と、ウヤガン祭に天からおりてくるとされる神との関係は不明確である。この点に関して、神が御嶽に常在しているとの観念は古くからのものではなく、比較的后世の考え方だとの見方がある⁽¹²⁾。その根拠として、ウヤガン祭の際にウヤガン達が山で何泊も「山ごもり」をし、祖神に成り変わる儀礼を行うことをあげている。神が常在しているのならば、わざわざ山の中で「神家」を設けて神を迎える意味が見出せないことになるからである⁽¹³⁾。

また、狩俣に伝わる神歌で見たように、フサやタービ、ピヤーンシに登場する神々には、「ウヤティダ（シマヌ神）」「アサティダ（大蛇神）」「マトガヤー」「真津真良」などの始祖神とその系譜の神々、および「天道の神」「父太陽」「親太陽」「夜の月」「根立て主」「4元の大神」「屋敷神」「お籠の神」「朝餉・夕餉の神」「家葺き針の真主」「家の神」など多くの神々が登場する。これらの歌のなかでは、神女に憑依する神である狩俣の始祖神は「私」と表現されている。その「私」（狩俣の始祖神）と、フサやタービの中で褒め称え語られる対象としての「大神」とは、明らかに区別されている。そして、「大神」である神は普段は天の蚊帳の中にすみ、「中島」（現世）においてくるとたわわれている⁽¹⁴⁾。

また、さらに、魚貝採集時代の祖先の霊と農耕時代の祖先の霊を区別し、前者をウヤガン神、後者をムトゥの神とする説がある。この説では、ウヤガン祭りにおいて、まず、農耕時代の祖霊であるムトゥ神が神女に憑依し、その憑依したムトゥ神が、魚貝採集時代の祖霊であるウヤガン神をむかえ、神女は一種の二重憑依の状態で村落の人々に顕現する、とされる。しかし、この説も根拠が具体的に示されておらず、確認が困難である⁽¹⁵⁾。

また、大神島の神は天から、狩俣の神は南の海から（ニーリすなわちニライカナイから）来ると観念されているが、これらの神と祖霊との関係も、これまでの研究成果や調査でも判然としていない。

なお、狩俣のウヤガン祭の最後に神女がうたう歌の中に、「ウブドゥンミ（南の浜にある岩礁）に来年もまたきて待っていたら神々は来臨する」とある⁽¹⁶⁾。神が天からくるにせよ、海からくるにせよ、最初に、浜辺に降り立つと観念されていると考えられる。同様のことが大神島においてもいえる。島の東側に「神をお迎えする浜」が存在し、やはりウヤガン祭の際に、そこで神をむかえる儀礼が行われている。したがって、いずれにせよ、神との接触の場の一つとして浜辺が利用されることは確かなことであろう。

南西諸島の神観念について、外間守善は、垂直的な神観念と水平的な神観念が併存しており、首里周辺では垂

直的な神観念が強く、そこから遠ざかるほど水平的な神観念が一般的となると指摘している。すなわち、海の彼方のニライカナイから来る神と、天から降りてくるオボツカグラの神との関係は、前者の観念が王国の形成によって変化し、それに中国の影響が加わって、後者の観念が生まれたとみている。二つの神観念は、いわば時間的経過によって変化したものと考えている⁽¹⁷⁾。

しかし、狩俣のウヤガン祭における神観念では、神歌に見られるように、天にいる大神と祖先神は、初発から明らかに別のものとして区別されており、時間的経過によって変化したものというより、当初から二つの神観念が存在し、それが続いているとみる方が自然なように思われる。例えば、先に、まず祖先神が神女に憑依し、それがウヤガンの神を迎えるとの説を紹介したが、浜での神迎えは神女がすでに何らかの神に憑依した状態で行われると観念されており、二つの神観念の併存を示唆しているように思われる。

また、ウヤガン祭で神女が憑依状態から覚めるのは、ウヤガンの神を送って後、里に下りてきてからと考えられているが、これはウヤガンの神が去ったあとも、神女はなお憑依状態にあることを意味し、やはりウヤガンの神ともう一つの神観念（おそらく祖先神）が併存しているのではないかと想像される。

なお、ヨゼフ・クライナーも、南西諸島の神観念として、来訪神と滞在神の観念があることを指摘しているが⁽¹⁸⁾、ウヤガン信仰の神観念においても、そのような来訪神と滞在神の区別の観念があるのか、先の外間説との関連を含め、今後調査を要する。

ただ、クライナーや鈴木正崇の研究によれば、滞在神は女性祭祀と、来訪神は男性祭祀と関係が深いとされており、女性祭祀でありながら、二つの神観念が併存しているウヤガン祭には当てはまらないように思われる⁽¹⁹⁾。

以上のように、狩俣・大神島の神観念については、なお不明な点が多い。ただ、いずれにせよ2つのタイプの神観念が併存していることはほぼ確かであり、それが時間的継承関係によるものが併存しているのか、全く異なる種類の神観念が併存しているかが問題となる。筆者はニリーの歌詞などからやはり異なる種類の神観念が併存しているのではないかと考えている。

なお、神観念との関係で、世界についての観念を考えるために、葬制について簡単にみておきたい。

かつて、狩俣では亡くなった人は部落の北東の方角にあたる海岸沿いに葬られていた。その場所は、海岸の高さ20メートルほどの崖となっており、潮が引いたときに浜辺を歩いてゆく。海水の浸食によってできた洞窟に遺体をそのまま安置し、風葬としていた。現在でも崖には無数の穴があいており、土で蓋をした跡があることから1つ1つが墓として利用されていたことがわかる。洞窟への風葬が行われていた当時、洗骨は行われておらず、洞窟に葬ったあとは遺体に近づくことは一切なかった。

部落の背後の森から崖をくだり、引き潮の海を北に向かって歩くと、部落から北東に位置するその崖はある。

かつては、海賊が財宝を隠したという伝説もあり、密かに発掘に訪れた人は数知れないという。最も大きい洞窟は高さ10メートル、広さにして奥行き10メートル幅20メートルほどもあろうかという広さである。潮が満ちると海水で満たされることになるが、現在でも海水のこない場所には数本の人骨が残っている。壁面にもいくつかのくぼみがあり、かつてはそこに遺体を安置していたためかなりの数の骨があったという。このような墓所とされた洞窟は数十メートルに渡ってつづいており、崖の高所にあるいくつかの穴では現在でも土壁でふさがれており、当時の様子をしのぶことができる。地元の男性H氏(85歳)の幼少期には、かなりの数のしゃれこうべが転がっていたという。また、この洞穴からさらに北にも舟でしかいけなない墓所があり、より古い時代にはそこに葬っていたとされる。また、パイヌスマとよばれる部落の南側の海岸も、葬地とされていた。ほとんどの墓が海に面した岩壁の中腹に掘り抜かれていて、一帯を穢れた場所として忌み嫌い、より近づくこともしなかったとされている⁽²⁰⁾。

また、ウヤガン祭に参加するウヤガン達は、ウヤガン祭の期間、死の穢れに一切近づいてはならず、もしも誤って不幸のあった家などに近づくと、ウヤガン祭の最中になんらかのトラブルがあると考えられていた。狩俣の女性は神役に就任している期間は、もしも家族で死者が出た場合には別の家に寄宿し穢れをさけたという。

大神島においてもかつては風葬であった。大神島では部落の西に広がる森の中の大きな岩のくぼみに遺体を安置し、その後は一切遺体に近づくことはなかった。洗骨の風習もなかった。年中行事の中には、先祖に対しての行事があるが、それは家の側の畑で墓の方をむいておこなうというもので、決して墓の近くではおこなわない。狩俣同様にウヤガンの期間中に葬式があると、島の人々は喪中の家には絶対に近づかない。また、喪中の家の人は祭りの期間、なるべく家からでずに、静かにして過ごす。

沖縄本島の場合、人の靈魂は生まれる際にニライカナイから来て、死後ニライカナイへ行く観念されている⁽²¹⁾。しかし、狩俣および大神島での聞き取りからは、明確に他界を表現する言葉を聞くことはなかったが、どのような他界観をもっているかは今後の調査で確認する。

以上、狩俣および大神島におけるウヤガン信仰の神観念について、現在の筆者の知見の範囲で、可能なかぎり検討した。しかし、先に記したように、ウヤガン信仰の神観念を明らかにしていくには資料的に不十分で、現在のところは断片的な分析にとどまらざるをえなかった。今後、さらに調査・検討する必要があると考えている。

5. むすびにかえて

これまで、狩俣を中心とした宮古島北部のウヤガン祭について、儀礼、神歌、神観念をとりあげ、検討を試みてきたが、その内容は、ほぼ以上のようなものである。その背景となる生活様式、社会構造の分析は別の機会に行いたいと考えている。

さて、ではなぜ、狩俣、島尻、大神島の宮古島北部三地域のみで、憑依型女性村落祭祀が最近まで存続してきたのだろうか。また、なぜこの地域にこのような神歌が強固に伝承されてきたのであろうか。最初の疑問にかえって、その問題を、これまでの検討を手がかりに概略的に考察しておきたい。

それを考える上で、手がかりとなるものの1つとして、宮古島におけるオナリ神信仰の欠如の問題がある。馬淵東一によれば、沖縄地方（八重山も含む）全般に、兄弟に対してその姉妹が霊的に優越する、いわゆるオナリ神信仰がひろがっているが、宮古島にはほとんど欠如している。馬淵は、「沖縄のオナリ神信仰は兄弟・姉妹から出発し、……一村一郷から一国まで主導的な影響をおよぼした」（馬淵，1974a）と述べているように、オナリ神信仰と村落女性祭祀は共に、男性に対する女性の霊的優越の表現形態としている。しかし、宮古島では村落女性祭祀が強固に存在しながら、オナリ神信仰はほとんどみられない⁽²²⁾。この点は、その他の研究や筆者の調査によっても、ほぼ妥当すると思われる。そこに、沖縄の他の地域と異なる、宮古島における信仰の1つの特徴がある。

もう1つの手がかりとして、沖縄本島、八重山地域にノロ制度がほぼ普及しているのに対して、宮古島だけはノロ制度が根付かず、古くからの地域の村落祭祀が存続してきている⁽²³⁾。

3つ目の手がかりとして、柳田国男は、日本本土・沖縄に共通する信仰形態において、女性村落祭祀と稲作を重要な特徴としてあげており⁽²⁴⁾、一般にもそのように考えられているが、宮古島においては女性村落祭祀の存続にもかかわらず、ごく限られた地域を除いて稲作はほとんど行われなかった⁽²⁵⁾。

これらの点、すなわち宮古島と沖縄他地域との相違に、ウヤガン祭が宮古島北部で行われている理由があるのではないかと筆者は考えている。

ここで、これまで宮古島を研究対象としてきた主な研究者たちの、この問題についての見解を整理してみたい。これらの宮古島ないし上記3地域（大神島、狩俣、島尻）に、女性村落祭祀や神歌の存続などを含め特異な性質がみられる理由として、外間守善は、フサやニーリの内容の分析から、母権制時代の名残であるとみている。すなわち、はじめ母権制であった狩俣は、時代を経るごとに男性へと権威がうつっていったが、ウヤガン祭などの祭祀には女性の権威が残り、母権制時代のなごりがウヤガン祭祀にみられるというのである。外間によれば、先にみたように、狩俣のニーリでは、まず、狩俣の始祖としての女性、マヤノマツメガが登場する。その後、大城マダマという女酋、さらにその生まれ子のはじめにふたたび女性が登場することから、祭式儀礼をつかさどる女権優位の時代を投影しているとする。さらに真津真良女酋の全盛の時代を経て、他部族からの侵略をきっかけにマズマラーの甥、マヤノマブコイが英雄的に登場する。そしてこのようなマヤノマブコイの英雄的出現こそが男性の社会的台頭であり、「呪力を持つ女酋の君臨時代から、武力をもつ

男酋の時代へとうつりかわりつつある時代」である。さらに、真津真良から大城殿（男性）へと権力が交代することにより「部落統率のための女権が男権へ移り変わって」いった。大城殿は鉄製の大槌、手斧などをもち、部落共同体が発展する。そして、大城殿からユマサズ（世勝り）の時代となると、築城、建築、造船などの社会事業がすすめられ、狩俣部落における政治的社会が成立していく⁽²⁶⁾。

ニーリの内容をこのように読み取った外間は、さらに、女性祭祀が強固に残っている理由として、豊穰の予祝歌が他地域に比べ少ないことなどからも類推されるように、狩俣など宮古島は農業条件が悪いため稲作に適さず、経済的に発展がおくれ、ひいては歴史的発展段階の遅れをまねいたためとしている。

「農業をするための立地条件にめぐまれなかったという風土的影響でもあろうが、農業に不適であるというそのことは、経済基盤の決定的な弱性を物語る要因でもあり、宮古島の歴史的発展段階の後進性にもつながっているように思われる。」（外間，1972b）

そのために、現在でもウヤガン祭のような女性祭祀が母権制の「残滓」として残っているというわけである。すなわち、狩俣は古くは母権制であったが、稲作の未発達による経済的後進性のため、その名残がのこったとするのである。

それに対して、馬淵東一は、沖縄での女性祭祀の存在について、かつての母権制の「名残」や「残滓」などではないととらえている。

馬淵によれば、そもそも母権制と父権制との関係は、かならずしも外間のように母権制が父権制に先行すると考えるべきではなく、父権制・母権制の他、双系制などが同時並行的に存在していたとしている。その中で沖縄地域の女性村落祭祀もまた、父権制下における祭祀の一形態だとしている。馬淵のみるところ、そこで、女性祭祀の根拠となっているのはオナリ神の信仰であった。オナリ神信仰とは、男性に対してその姉妹が霊的に優越をすすめるものである。そのような信仰は、沖縄ばかりでなく、メラネシア、フィジー諸島にも分布する。馬淵は、このような、父権制のもので、姉妹およびその娘が兄弟およびその息子や娘を祝福または呪詛する霊能を持つ地域を「オセアニア型」とし、反対に、同じ父権制下で、母方父系氏族の成員、すなわち母の兄弟の男性子孫が霊的優位に立つ地域を「インドネシア型」としている。これは、台湾中部山地に住むブヌン族ツォウ族やインドネシアでみられるものである。そして、沖縄のオナリ神信仰もまたオセアニア型に類するものと位置づけている。その上で、沖縄においては、そのようなオナリ神信仰が、「兄弟・姉妹から出発し、一村一郷から一国まで主導的な影響をおよぼした」として、女性村落祭祀もその延長線上に考えているのである⁽²⁷⁾。

すなわち、馬淵は、台湾や東南アジアなどの沖縄周辺世界の調査研究から、この地域には女性の霊的優越を示すエリアと男性の霊的優越を示すエリアがあり、沖縄の

オナリ神信仰や女性村落祭祀儀礼は、前者の女性が霊的に優越するパターンに属するとする。そして、この型は、母権制から父権制への移行を示すものではなく、父権制のもとでの上記2つのパターンの1つに属するものと見ているのである。ただ、馬淵は、宮古島でなぜオナリ神信仰がみられないのか、ということに関してははっきりした考えを示していない⁽²⁸⁾。

また、沖縄紅型の復興者として知られる、元沖縄県立芸術大学教授・鎌倉芳太郎は、1911年の宮古島調査をもとに（これは宮古島の本格的調査としては最も早いものである）、下記のように記している⁽²⁹⁾。

「この部落〔島尻部落〕の成立は古く、初めは母系家族の農耕女性集団によって、稲作を神事としこれを中心に各種食料の農耕を行い、また一方芋麻を栽培し、これを紡いで上布の機織りをもって生計をたてていたことは、この地の婦人の手の甲の入れ墨からも推察される。

その時代には男性は池間島を拠点として、漁労航海の仕事に従事し、島内各地の女性に各々その身分に応じて通婚したように思われる。」〔 〕内筆者加筆（鎌倉、1982）

「宮古島狩俣部落は……その北方西ノ山から高間原に至る間に、山嶽崇拜から出た太陽および火の神を母なる祖霊と信ずる祭壇があり、……これを神事として母なる神の加護を祈って生活した女性集団の宗家の殿として祭祀されている。……狩俣神座で最も原初的な拝所は大城本である。太古の時代、此処に渡来した稲作農耕の女性集団の中心で、当初から由緒ある母系母権の家系を継いで母なる祖霊を祭祀する家であった。」（鎌倉、1982）

「この太陽信仰による『時取り』『日運び』の祭祀は、漁労航海に従事する男性海神集団にとっても、重要な神事であったと思う。」（鎌倉、1982）

つまり、狩俣、島尻では、母子集団が農耕を基本に居住し、それに対して、漁労を基本とする男子集団は、池間島に居住し、それぞれが特有の祭祀を行っていたとみているのである⁽³⁰⁾。池間島の北東部には周囲約25キロメートルにもおよぶ広大な漁場、「八重干潮」が存在している。この豊かな南西諸島最大規模の漁場があるため、かつて男性たちは、漁労基地である池間島に集まって集団で漁にでたと、鎌倉は考えているのであろう。戦後においても大神島のほとんどの男性が、夏のあいだは鯉漁のため池間島に居住していた事実もあり、鎌倉の仮説はそれほど突飛なものではない。

鎌倉も示唆しているように、このことと、狩俣・島尻・大神島の村落女性祭祀の強固な存続と、何らかの関係があるのではないだろうか。ちなみに、池間島では、ユークイなど女性村落祭祀も存在するが、それは比較的新しいもので、むしろ、狩俣・島尻・大神島と対照的に、ミヤクツツとよばれる男性祭祀の色彩の濃厚な祭祀が、より重要な位置を占めている⁽³¹⁾。

このような観点からすれば、ウヤガン信仰の研究には、狩俣、島尻、大神島のみならず、池間島の調査研究が必須となるといえよう。

いずれにせよ、これらの諸説の本格的検討は、狩俣・島尻・大神島・池間島のより立ち入った調査とともに、今後の課題としたい。

注

- (1) 島尻、狩俣での祭祀の中断は、神役女性の高齢化と後継者不在によるもので、祭祀が中断された今も本文で述べた禁忌は守られている。
- (2) 柳田国男の調査当時については（柳田、1968）参照。沖縄のノロ制度など女性祭祀については（宮城、1979）参照。
- (3) 狩俣のウヤガン祭についての記録としては、（岡本、1971）、（本永清、1999、2000）、（比嘉、1991）、（新里、1978）、（奥濱、1997）などがある。
- (4) 宮古島に伝わる神歌をまとめたものとしては（外間・新里、1972、1978）などがある。また、その歌謡的側面の分析としては（内田、2000）がある。
- (5) 筆者は2006年2月から現在にいたるまで約12回、延べ約260日間ほどにわたって宮古島の狩俣、大神島地域を中心に宮古島北部周辺地域の現地調査を行っている。なお、大神島のウヤガン祭については拙稿（2009）にて報告している。
- (6) 人口以外の概要については（平良市史第7巻、1978、2～14）参照。
- (7) 1911年当時の石門の様子は（鎌倉、1982）に見ることができる。現在はコンクリートで補強されているが、石門の形をとどめ保存されている。
- (8) ウヤガン祭についての調査報告については注（3）を参照。
- (9) 狩俣のウヤガン祭の儀礼の内容については、前述の先行研究および、筆者の聞き取りを総合して記述する。
- (10) 神歌については全て（外間・新里、1978）から引用した。
- (11) ウヤガンを部落の始祖ととらえているものについては（比嘉、1991）などがある。
- (12) 神が普段どこにいるのか、という問題について述べているものに（外間、1995）などがある。
- (13) 主要なものについては（外間、1995）がある。
- (14) 例えば、夏祭りで謡われるヤーキャ声とよばれるタービなどにそのような表現がある。（外間・新里、1978）
- (15) この見解は（比嘉、1991）によるものである。ウヤガン達が果たして二重憑依の状態であるのかという点については筆者の調査においても確認が困難であったが、神の存在として、漁労採取時代と農耕時代の祖霊を区別するという視点はウヤガン祭を考察する上で看過できないものと考えられる。
- (16) この歌の内容は（比嘉、1991）による調査によるものであるが、筆者の調査においても、狩俣及び大神島のウヤガン祭において、儀礼の始めの段階に浜で神を迎える儀式が行われることが確認されている。
- (17) 沖縄の神観念につて外間が述べたものとして（外間、1994）がある。
- (18) このことは（住谷・ヨーゼフ、1977）に詳しい。

- (19) この点については(鈴木, 2004) 参照。
- (20) このことは(本永, 1983) に述べられているが、筆者の調査においても同様の聞き取りが得られた。
- (21) 他界観については様々な論考があるが、ニライカナイに関する論考としては(外間, 1994) がある。
- (22) このことについて馬淵は、宮古島の特徴として「稲に関する儀礼が一向に見出されず、また、オナリ神信仰を思わせる伝承がほとんど存在しないらしい」点にあるとしている。(馬淵, 1974c)
- (23) このことについては(佐々木, 1988) 参照。
- (24) これらの柳田の見解については(柳田, 1968) 参照。
- (25) 宮古島で稲作が行われていたのは、狩俣の隣に位置する島尻集落のみである。(平良市史編纂委員会編, 1978)
- (26) 第3節神歌で述べた狩俣のニーリは外間・新里(1972、1978) によって採取されたものであるが、その解釈は(外間, 1972b) に詳しい。
- (27) このような馬淵の見解について述べたものとして主なものは(馬淵, 1974a) がある。
- (28) 前述したように、宮古島について稲作儀礼およびオナリ神信仰がみられないことに注目していた馬淵であるが、その後、それらの理由については詳しく考察していない。(馬淵, 1974a)
- (29) 鎌倉の調査の記録については、文章の他に数点の写真が残っている。(鎌倉, 1982)
- (30) なお、男子集団、母子集団については岡(1979)、住谷(1983) 参照。
- (31) 池間島についての詳細な調査を行った野口によれば、ミヤークヅツは1年の中でももっとも盛大な行事であり、ムトゥ集団を中心にしたものである。(野口, 1984)

参考文献

- 市川光雄(1978). 宮古群島大神島における漁撈活動. 探検 地理 民俗誌. 中央公論社.
- 稲村賢敷(1972). 宮古島庶民史. 三一書房.
- 稲村賢敷(1977). 宮古島旧記並史歌集解. 至言社.
- 伊波普猷(1927). をなり神の島. 民族, 2巻2号.
- 牛島巖(1969). 琉球宮古島諸島の祭祀構造研究の問題点—来間島の祭祀組織を中心に—. 史潮, 106号.
- 内田順子(2000). 宮古島狩俣の神歌. 思文閣出版.
- 岡正雄(1979). 異人その他 日本民族=文化の源流と日本国家の形成. 言叢社.
- 岡本恵昭(1971). 宮古島の祖神祭—狩俣・島尻を中心として. 沖縄のまつり. まつり同好会.
- 奥濱幸子(1997). 暮らしと祈り—琉球弧・宮古諸島の祭祀世界. ニライ社.
- 鎌倉芳太郎(1982). 沖縄文化の至宝. 岩波書店.
- 鎌田久子(1961). 神願いにささえられて. 伝承文化, 2号.
- 鎌田久子(1962). 大神島の祭祀組織と年中行事. 民族学研究, 27号.
- 鎌田久子(1965). 日本巫女史の一節. 成城大学文芸学部十周年記念論文集.
- 鎌田久子(1971). 宮古島諸部落の神役名称. 日本民俗学, 78号.
- 鎌田久子(1976). 守護神について. 沖縄—自然・文化・社会. 弘文堂.
- 川田桂(2009). 沖縄宮古島のウヤガン信仰—大神島を中心に—. 名古屋大学人文科学研究, 38号.
- 慶世村恒任(1972). 宮古史伝(復刻版).
- 佐々木伸一(1980). 宮古島の部落祭祀. 民俗学研究, 45巻2号.
- 佐々木伸一(1988). カンカカリ達—宮古島その他のシャーマンの宗教者—. 日本民俗学の展開. 雄山閣.
- 島村恭則(1993). 民間巫者の神話的世界と村落祭祀体系の改変. 日本民俗学, 194号.
- 新里幸昭(2003). 宮古の歌謡. 沖縄タイムス社.
- 新里幸昭(2005). 宮古歌謡の研究(私家版).
- 鈴木正崇(2004). 祭祀と空間のコスモロジー—対馬と沖縄. 春秋社.
- 住谷一彦(1983). 歴史民族学ノート. 未来社.
- 滝口直子(1991). 宮古島シャーマンの世界—シャーマニズムと民間心理療法—. 名著出版.
- 鳥越憲三郎(1965). 琉球宗教史の研究. 角川書店.
- 仲宗根将二(1997). 宮古島風土記 上・下巻. ひるぎ社.
- 仲松弥秀(1990). 神と村. 梶社.
- 野口武徳(1979). 宮古群島. 沖縄の民族学的研究. 日本民族学会.
- 野口武徳(1984). 池間島民俗誌. 未来社.
- 比嘉政夫(1983). 沖縄の門中と村落祭祀. 三一書房.
- 比嘉康夫(1991). 遊行する祖霊 ウヤガン. ニライ社.
- 東恩納寛惇(1950). 南島風土記. 沖縄文化協会沖縄財団.
- 平良市史編纂委員会編(1987). 平良市史, 第7巻.
- 外間守善(1968). 宮古島狩俣の神歌. 文学, 36巻. 岩波書店.
- 外間守善(1972a). 南島歌謡の系譜(上). 文学, 40巻4号. 岩波書店.
- 外間守善(1972b). 南島歌謡の系譜(下). 文学, 40号5号. 岩波書店.
- 外間守善(1994). 南島の神歌. 中公文庫.
- 外間守善(1995). 南島文学論. 角川書店.
- 外間守善(2002). 沖縄学への道. 岩波書店.
- 外間守善・新里幸昭(1972). 宮古島の神歌. 三一書房.
- 外間守善・新里幸昭(1978). 南島歌謡大成Ⅲ・宮古編. 角川書店.
- 真下厚(2001). 沖縄の祭祀と神役—宮古島狩俣の祖神祭りをめぐって—. 祭祀研究, 1号.
- 馬淵東一(1974a). オナリ神信仰の回顧と展望. 馬淵東一著作集補巻. 世界思想社.
- 馬淵東一(1974b). 南島の世界観をめぐって. 馬淵東一著作集補巻. 世界思想社.
- 馬淵東一(1974c). 沖縄先島のオナリ神. 馬淵東一著作集 第一巻. 世界思想社.
- 宮城栄昌(1979). 沖縄のノロの研究. 吉川弘文館.

- 本永清 (1977). 宮古の神話と神歌. 国文学解釈と鑑賞. 至文堂.
- 本永清 (1983). 三分観の一考察—平良市狩俣の事例—. 琉大史学, 4号.
- 本永清 (1999). 宮古島のウヤガン祭祀. 環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀. 凱風社.
- 本永清 (2000). 宮古島. 日本の神々 13巻. 南西諸島. 白水社.
- 柳田国男 (1968). 海上の道. 海南小記. 妹の力. 日本の祭. 定本柳田国男集, 1巻, 9巻, 10巻. 筑摩書房.
- 山下欣一 (1977). 奄美のシャーマニズム. 弘文堂.

(受稿 : 2010年6月9日 受理 : 2010年10月10日)